

令和7年度
第71回指導者会議

・開催日

令和8年3月7日(土)

・開催方法

対面およびオンライン会議

・会議プログラム

指導者会議のこれまでとこれから

1. 史料にみる指導者会議70年の歩み
2. 指導者会議における陸上競技用語をめぐる議論
3. 学連トレーニング方式の実践とブレイクスルー

・演者

プログラム1

大林 太朗(筑波大学 体育系)

プログラム2

杉浦 澄美(筑波大学 体育系)

プログラム3

永井 純(専務理事)

・司会

船原 勝英(倫理委員会 委員長)

木越 清信(指導者運営委員会 委員長)

・まとめ

船原 勝英(倫理委員会 委員長)

本稿では会議の概要について報告する。

【プログラム1】

・学生陸上の端緒から日本学連の創設

大林) 通史上学生陸上の始まりは1878年の札幌農学校の競技とされている。1907年に学校間の競技会が開催されるようになり、この年が学連としての陸上競技史の起点と理解されている。1919年に、関東学連のルーツとされている全国学生陸上競技連合ができた。1920年代に入り、アメリカの大学陸上協会の規約を学連の担当者が翻訳し、その中で学連

の独立自治という考え方がこの段階で認識された。1928年に第1回日本インカレが始まり、そこでの発会式を経て日本学連が創設された。

・日本学連の発展と戦争の影響

大林) 1930年代にはいと各年度に対校選手権や日米の学生対抗戦を開催したり、1935年にはブダペストでの国際大会(現在のWUG)に出場したりするなど、国際的な舞台に加盟し、地位を確かなものにした。ただ1940年代は大戦の影響もあり、事実上の解散状態となったとされている。戦後1947年には日本インカレが5年ぶりに開催され、またこの年から天皇賜盃が与えられた。そして翌年から女子競技種目が開始された。

・指導者会議の発足

大林) 1953年に戦後初の海外遠征となるドルトムントでの国際大会(現在のWUG)に参加。全体として3位という結果を取めたが、当時監督として同行していた大島健吉(当時日本学連ヘッドコーチ)は世界との差を痛感し、帰国後の1955年に第1回の指導者会議を行った。基本方針としては国内の指導者のレベル向上、そしてそのための科学と指導現場の融合による科学的思考と実践を深めることであった。

・会議の歩みと議題の変遷

大林) 資料を通読し、私なりに4つの時代区分をさせていただいた。創設当初は講習会的な色彩が強く、高体連指導者からの参加もあり、効果は大きかったと考える。会議と並行して、日本学連トレーニング方式が確立され、他のスポーツ界にも影響を与えた。続いて1960年代後半から、70年代にかけての約15年間で区切った。理論的な体系を整えた指導者会議は、国際的な議論の擦り合わせと科学との融合を本格的に進めていく時代となった。続いて80年代となると女子選手に関する話題が出てくるようになる。女子強化を主眼においたシンポジウムや健康に関する踏み込んだテーマが軸となる回も散見されるようになる。4つ目として2000年代以降で、ここで日本陸上競技学会が立ち上がり、そこでの協調が重視されるようになる。学校での陸上競技に関する授業づくりやアスリートの盗撮防止、また熱中症対策など現在に通ずる話題も議論され始める。総じて、どのように競技力を高めるかの議論とともに、いかに学生アスリートを守るかという論点が厚みを増してきたとみえる。

・指導者会議への見解

大林) 1955年の発足以来、70回を数えたこの会議は、我が国の学生陸上界に新しい問いを生み、学術研究と実践の往来を通してその解決に資する知見を紡いできた。そこでは、科学者と指導者、学生アスリートまでもが集う唯一無二の空間があったのだと思う。そして、70年間の確かな歩みのなかで培われた自負と使命感は、ひいてはこれからの指導者会議の在り方と役割を考える上で重要な論拠となるものとなるだろう。

【プログラム2】

・指導用語概念の明確化

杉浦) 学連指導者会議設立時から「陸上競技用語の概念規定」についての議論が行われて

いた。議論の問題意識は、競技者や指導者の間で起きている用語と理解の不一致が、研究や競技実践、ひいては日本陸上界の発展に対して障害となるという点であった。また、1959年から1960年にかけては、指導者会議が中心となって陸上競技用語研究委員会が組織され、議論の末に「近代陸上競技の用語」がまとめられた。例えば、走高跳の跳躍方法について、「正面跳」が削除され、跳躍の仕方(跳び方)をよりの確に形容した「はさみ跳」に統一された。このように、陸上競技用語に関する議論では、競技者がその用語から正確な動きのイメージを得られるか、という点が着目されていた。

・会議での議論

杉浦) また、1956年から1964年ごろにかけては、指導者会議が舞台となり跳躍の踏切に関する議論、いわゆる「つっぱり論争」が行われていた。加藤橘夫によれば、その議論は科学者に対する経験論者の挑戦であるかの様子を呈したという。数年の指導者会議での議論を通じ、より複合的な面から動きを把握する必要があるのではないかという考えが生まれた。

・議論の終着点と用語を深く理解することの重要性

杉浦) 陸上競技用語は、技術やトレーニングの進展に対して重要視され、指導者会議では設立当初から議論されてきたことが分かった。つっぱり論争について加藤が書いたように、正しいことを言う研究者に対する経験論者の挑戦という構図ではなく、どうしたら良い実践に繋がるのかという問題意識を共有したうえで、研究者の視点と実践者の視点とをどのように組み合わせていくか、という方向に議論が進んでいた。動きに関する言葉の表現は非常に複雑で、陸上競技用語をめぐる当時の議論は現在の指導現場でも通ずる問題である。元来人が言葉に求める意味の把握というものはかなり身体と結びついていると考えられ、競技者と指導者の間、指導者間や研究者同士においても、言葉をつくした議論の大切さを再認識させられた。

【プログラム3】

・日本学連トレーニング方式の出会い

永井) 当時の陸上界としては迫りくる東京五輪、次は高地で行われるメキシコシティに向けて気運があがっていた。それに加えてスポーツを科学的に捉える風潮が生まれてくるなかで、指導者会議から学連トレーニング方式というものが確立された。これは海外の方式に検討を加え、日本の現状を勘案して作られたものであったため、コーチもおらずただ走って鍛えていた当時の高2の私には非常に刺激的なものであった。

・実践と成長

永井) 陸マガに掲載された学連トレーニング方式には酸素摂取能力だとか科学的なことが丁寧に書かれていた。これを見るのが楽しみとなっていた。大学進学後も、それを参考にして、自分のトレーニングを組み立て、後輩のトレーニングも作ったりしていた。この方式の優秀な実践者だったと回想する。実際に東京五輪の年の日本選手権では優勝することができた。ただ記録は低調だった。

・日本学連トレーニング方式の限界

永井) 大4の際に青山学院大学の院長や体育会のOB会長から、青山学院大学を箱根駅伝に出場させてもらえないかという誘いがあり、熟考の末引き受けた。その頃には日本学連トレーニング方式はしっかりと身につけていたので、ある程度までの強化は順調にできて箱根駅伝でもシード獲得まではたどり着いた。ただ日本学連トレーニング方式はある程度の強化ができて、それからブレイクスルーするためにはその人にあったトレーニングをしなければならないことが分かった。それが日本学連トレーニング方式との決別だった。

・アプローチの転換

永井) それからスキー場に50日間入りこんだことがあった。ただ滑るだけでなく急斜面で上体を固めて、膝下だけで滑るなどして、下半身や上半身の強化、体のバランスなどができ、体つきも大きく変わった。他にもバドミントンなど色々な種目をやったら、記録が格段に伸びた。それから800mで日本記録を更新するレベルに到達。メキシコ五輪の代表選考にも滑り込むことができた。

・今の指導者会議の課題

永井) 日本学連における指導者会議の存在は、71年も続いているからこそこの存在は重いものだと思う。良いことはやっていると思うけど、やり方が少し好ましくないのかなと感じることもある。これまでに歴史の中から内容的には幅広く世に貢献できる存在になることが必要だと思うし、指導者会議から派生した日本陸上競技学会とジョイントしたりしてもっと広く活動した方が良いのではないかと感じている。

【本シンポジウムのまとめ】

船原) 70年に及ぶ指導者会議の長い歩みを、スポーツ史の専門家である大林先生に分析・位置付けをしてもらった意義は大きい。初期の成果である「学連トレーニング方式」がまとめられた時代背景には東京オリンピック開催という大きな課題があり、当時の最先端の学者が集まって熱心に論議され、研究成果が体系化された。

杉浦先生による「プログラム2」では、競技用語の共通理解がなかったことで研究や指導の現場での混乱が生じ、競技用語の統一、概念規定から始まったことが紹介されている。当時は競技の外形的な経過の分析と、現場指導者の感覚とは大きなずれがあった。典型的だったのは、物理学者の小野勝次さんが走幅跳の踏切を「突っ張り」と表記したことで、現場指導者から多くの疑問や反発が上がったケース。現場の感覚では、踏切は「たたく」意識が強かったため、物理的な分析が受け入れられなかった。

小野さんは、水平スピードを上方向へ変えるには「突っ張り」踏切が効果的と指摘。走高跳で画期的な技術の変化があるとすれば、ベリーロールがいいとか、正面跳がいいかという問題ではなく、スピードを利用する技術だけにあると述べている。当時、背面跳は生まれていなかったが、最もスピードを生かせる背面跳の出現を予言するような鋭い見立てだった。

初期の会議を主導した大島鎌吉さんは科学的な見方ができる人物だったが、三段跳の五輪

メダリストとすれば、五輪を控えてパフォーマンスを発揮できない選手たちに物足りなさを感じ、メンタル面での弱さを「根性」に求めた。本番の東京五輪では、金メダルを獲得した女子バレーボール大松監督らの成功で「根性論」が一世を風靡。日本学連トレーニング方式によって確立された科学的なトレーニングは影が薄くなった。スポーツ心理学によるメンタル面の腑分けも不十分で、現場のコーチにも科学的な取り組みを活かせるレベルになく、競技力向上にはなかなか結び付かなかった。

今後の指導者会議は、研究者と現場の指導者が一堂に会して最先端の研究成果を共有することが大事。大量の知識や情報が得られる現代だからこそ、それを整理・分析し、トレーニングに関する総合知、新しい時代の日本学連トレーニング方式を作り上げるべきではないか。